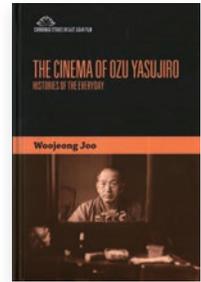


## 日本の近代を小津の日常からひもとく

—Woojeong Joo, *The Cinema of Ozu Yasujiro: History of the Everyday*  
(Edinburgh University Press, 2017).

洞ヶ瀬 真人



ジュ・ウジョン (Joo Woojeong/朱宇正) 著 *The Cinema of Ozu Yasujiro: History of the Everyday* がエディンバラ大学出版から上梓されている。小津研究に新風を吹き込む待望の書だ。日本ではその魅力が若い世代にますます伝わらなくなっている感があるが、海外では未だ小津安二郎に対する関心は高い。自作の中でオマージュを捧げ信奉し続ける映画作家も多く、小津の個性的な映画表現は、いまやアートシネマの基礎教養と言ってよい。また、海外の人々にとって小津作品が、日本人の日常生活を切り取ったような物語だけでなく、画一的で静逸な映像表現も含めて「日本」を感じさせるアイコンとなっていることも変わらない。小津作品の「日本」への注視は、小津研究の古典であるドナルド・リチーの論以来の主題であり、ポール・シュレイダーやデヴィッド・ボードウェル、ノエル・バーチなどの論で継承され、海外の小津研究の系譜を形作ってきた。本書は、これを踏まえて小津作品の「日本」的と見なされてきた表象に再度目を向けるものである。だが、これまでの議論がそれを日本の伝統や欧米文化へのアンチテーゼとして論じてきたのに対し、ジュは「日本」表象の意味を、戦前戦後を貫いて小津作品が描き続けた日本人の「日常生活」に差し戻し、近代化によって急速に変化してゆく現在とそのまま残り続ける過去が交錯した近代日本の歴史的な文脈・社会的経験と照らし合わせて再考するのである。

これまでの小津論は、たとえば海外へも翻訳された蓮實重彦や吉田喜重の名高い表象論と、小津の発言などをまとめてきた田中真澄の労作との間にほとんど接点がないように、作品の表象分析と史的言説研究に二分される傾向にあった。これに対してジュの論考の主旨は、一方に偏りがちな二つの観点の重なり合う場を小津映画の「日常」に求めることで、表象と言説・歴史文脈の両面から小津論を提起する点にあると言える。だがこれは、表象に社会の表われを読み取る単純な社会反映論とも異なる新しい

試みである。特に斬新なのは、「日常」のダイナミズムへの着目から、静的で変化がないというイメージで捉えられがちな小津作品が持つ表現の変化や差異など、不安定に移ろう側面を浮き彫りにしている点だ。日常とはそもそも形のない曖昧なものである。ジュは、日常生活の哲学を切り開いたアンリ・ルフェーブルを引きながら、それが場所や時代で変化する現象でありつつ何かしら普遍性を感じさせる構造をも持ち、その現象と構造の間をうつろう動的なものだと定義する。そしてこれを描く作品は数あれども、かなり独特な手法で日本人の日常生活を映画に捉えてきたのが小津作品だという見立てのもと、小津独特の表象が、どのように動的な「日常」との交渉のなかで形をなしているのかを、各作品の背景となる歴史文脈とつぎ合わせながら丹念に読み取ってゆく。これによって著者は、静的表現の様式性や「日常」に対して抱きがちな一定不変という印象を覆し、小津作品が、時代背景や階級問題に加え、ジェンダーや世代、日本の家庭内と地理的な空間の差異、映画ジャンルや撮影所の方針が課す制約、リアリズムに対する製作者や批評家間での捉え方の違いといった多様な問題を、各時代の日常に応じて色とりどりに描いていることを明らかにするのだ。

章立ては、無声映画期にはじまった小津の1920年代からその晩年の1960年代までを時系列に追ってゆく構成になっている。序章で小津の日常に対する理論的検討を行った後、第一章では小市民映画『生まれてはみたけれど』(1932)の分析を中心に小津の無声映画期が、第二章では、日本映画のトーキー化を背景にして変化しゆく小津の試みが、『浮草物語』(1934)などの「喜八もの」や『東京の女』(1933)などの女性表象とともに考察される。第三章で、日中戦争勃発後の作品を小津の従軍体験と共に検討したのち、第四章にて、小津の戦後とはどういうものかという問いのもとで最盛期の戦後作品が論じられる。そして、第五章で晩年の小津作品が、消費社会の勃興を背景にした

『お早よう』(1959)の分析を中心に論じられる。全体的に、小津映画に表現された登場人物の日常生活に着目したことで、人物自体を通してサラリーマン、モダン・ガール、戦後の女性像といったジェンダー的な問題が、また人物が生活を営む「茶の間」のような家庭空間や、往来する都市と地方などの空間的問題がとりわけ焦点となっている。この二つの観点に関するまとまった小津論はこれまでになく新しい。そして、何よりも秀逸に感じられるのは、小津の35年間に渡る映画人生とその作品の移りゆきを追う本書全体を通して、戦前戦後の日本人の「日常」自体の変化が、小津という映画監督の視点とその作品の映像から理解できることだろう。小津作品の中にある多様な問題を、映画産業の状況や同時代の他の監督の作品と比較しながら論じていたり、各時代の社会思想にも触れながら考察が行われてもいるため、ある意味本書は、小津というレンズを通して描写した日本映画史であり、日本の近代を戦前から貫戦期的な観点で見直す社会学にもなっている。

こうした叙述は、戦時中の小津の中国大陸従軍経験や作品中の中国的な表象に着目することで、「日本」イメージを鮮やかに批判分析し話題を呼んだ與那覇潤の著作『帝国の残影 兵士・小津安二郎の昭和史』(NTT出版、2011年)に重なる部分もある。だが、與那覇の論が、どこか中国表象や網野善彦・竹内好などの思想言説に小津映画を当てはめる語り口だったのに対し、ジュは、作品と交わる思想や理論の方を小津映画から検証する論述姿勢をとっている点で趣きの異なる議論を展開する。彼の論でもルフェーブルやミシェル・ド・セルトーの日常生活論が理論的な拠所とされるが、これも理論ありきではなく、小津の作品表現に即応する思想が注意深く選ばれている印象を受ける。たとえば、ド・セルトーの理論に依拠するのは、生活空間で営まれる人々の実践行為のなかに、生活を一元管理するシステムティックな視座のほころびる契機を見出すド・セルトーに似た態度が、小津作品の表現中にも見出されるからだ。『生まれてはみたけれど』(第一章の議論)では、会社の上司に頭が上らない父親とその姿を嫌い抵抗する子供たちの姿が、郊外空間を背景に同居する形で描かれる。この日常的な場面は、しがらみに縛られる小市民生活への抵抗とも甘受とも言い切れない曖昧さを孕みつつも、確かにド・セルトーの日常実践のようにそこに亀裂が生じることで、小市民のしがらみが脱線させられたように朗らかに映し出されている。ジュはこのような、社会的に課せられた秩序に直接的な批判を与えるのではなく、

日常的な表象によって秩序に裂け目を生じさせる小津映画の表現を「脱線」(deviation)と呼び、理論よりもこちらを軸に論を展開する。また著者は、ルフェーブルに対してもこのような観点に立つことで、消費主義のもとで疎外された日常生活に対して変革を求めるマルクス理論的な観点は小津にはないことをむしろ積極的に認めつつ、技術発展、消費主義、都市化を焦点にした社会分析という面でルフェーブルに匹敵する眼識を小津の中に見出してゆく。

さらに、同様の姿勢で指摘する、小津作品とヴァルター・ベンヤミンの歴史意識との重なり合いも興味深い。映画論では近代性を論じるとき、ベンヤミン自身が映画をその典型例と見ているため、彼の思想にある、都市生活者が近代生活で味わう断片化したショック体験の議論に目を向けることが多い。だがジュは、その対となるベンヤミンの歴史意識の議論に着目する。過去が一瞬一瞬の現在において捉え返されることで「歴史的唯物論」が紡がれるとするその歴史概念は、近代的な体験のなかで凋落してゆく過去の痕跡としての「アウラ」や、そのアウラを生み出す、意識されない過去の歴史的堆積によって紡がれた経験的記憶を、瞬間的ショックに満ちた近代の体験的記憶とにイメージを介して弁証法的に対置することから導かれた、歴史による近代批評となっている。そして、戦後の小津映画にも「アウラの凋落」に似た表象を見出す著者は、小津の表現に「弁証法」はないものの、映画に描かれた戦後の現在のなかに、空間、ジェンダー、世代、いずれの観点においても、戦前の過去が記憶となって「浸潤」(permeation)することで、戦争の経験から連続した歴史感覚が表現され、ベンヤミンと同様の、歴史による近代批評を形作っていると見るのだ。

近代日本の社会生活は、都市化やメディアの発達といった近代化現象、また戦後であれば、消費社会のもとで起こった個人回帰の現象を欧米社会と共有しているため、欧米文化圏での近代性に関する議論に重なる。他方で日本の近代化は、西洋に範を置き、西洋的でないものを否定するかたちで進んだため、これに対する抵抗から、日本の伝統への回帰も伴う矛盾した動きとなった。また、欧米の文脈ではその消費主義的側面が批判されがちな個人回帰は、日本の文脈では戦前の国家主義への反動という意味合いのもと、自由解放への発展を目指す理想的な個人主義と見られてきたふしがある。このような欧米と重なりつつも別文脈の歴史を刻んでいたりと、伝統が近代かと

いう二項対立で捉えられない部分を抱える近代日本の問題に関して、これまでハリー・ハルトウニアンや吉本光宏などの研究者から小津映画の文脈に関連づけて重要な提言がなされてきた。ジュはこうした議論のひとつひとつに小津の表象と文脈に注意深く目を配りながら応答してゆくことによって、「日常」という理論的枠組みのもとで可視化されるずれ・矛盾・変化に彩られた新しい小津論を組み上げている。

與那覇の著作以来、日本の小津研究はやや停滞気味である。貴田庄『小津安二郎と「東京物語」』（筑摩書房、2013年）や小野俊太郎『『東京物語』と日本人』（松柏社、2015年）といった著作が、これまでの日本語文献の小津研究を総括した書物として秀逸な一方、新しい論点を提出する研究には乏しい。未だ枯渇していない小津論の豊穡な可能性を垣間見せているジュの著作は、こうした状況への大きな刺激となるはずだ。邦訳が待ち遠しい。